

●読書感想文コンクール 小学校高学年の部●

最優秀賞

竹内 耀 (たけうち ひかる) 大浜小学校 6年

題名：禎子の千羽鶴

図書：禎子の千羽鶴

終戦から約八十年。戦争を経験していない人が大半の世の中で、あるニュースが話題になりました。「長崎市の爆心地公園で千羽鶴や花が燃やされる」という事件。戦争についてやんわりとしか知らない私でも、すごくいけないことだということは分かります。しかし私はそのニュースを見て疑問をもちました。それは「なぜ千羽鶴が供えられているのか」ということです。そこで、私は「禎子の千羽鶴」という本を読むことにしました。

広島市にある「原爆の子の像」。この像のモデルになった禎子こと佐々木禎子さんです。佐々木家は禎子をふくめ四人兄弟で、家族や友達と幸せに暮らしていました。そんな日々も長くは続かず、一九四五年八月六日。広島に原爆が投下されました。なんとか生きのびた禎子たちに降り注いだ黒い雨。どろっとしたねばり気のある雨。それが放射性物質をふくんだ「死の雨」だとは、禎子たちには知るよしもありませんでした。たっぷり浴びた放射線はゆっくりと、しかし確実に禎子の身体をむしばんでいったのです。

小学校六年生の冬、ついに禎子の身体に異変があらわれます。ついこの前まで元気だった禎子が次第に不調をうったえるようになったのです。検査の結果、余命宣告を受けた禎子は入院し、一年経たずでこの世を去ります。そんな禎子が入院中にやっていたことがありました。鶴を折ることです。禎子は懸命に折っていた折り鶴に祈りをこめました。最初の千羽は自分の病気が治るように。次の千羽は父の借金のこと。自分の祈りがかなわなくても、病気が進んで苦しくても、禎子は家族の幸せを祈ったのです。私は、この本を読んで自分を情けなく思いました。同い年だというのに、禎子の方があまりにも大人にみえたのです。禎子は強く、思いやりのある子でした。苦しいと弱音をはくこともせず、明るくふるまってみせました。鶴を折りながら、禎子はもう自分が死んでしまうことを分かっていたはずなのに。

私は、修学旅行で長崎に行きます。禎子は広島でしたが、長崎でも禎子のように死んでしまった人たちがたくさんいます。その事実を、人々の思いをこれから何年何十年と語り継いでいく必要があります。語り、聞き、学び、そして忘れない。その姿勢こそが今の私にできることなのではないかと思いました。きっと長崎に行く前に私たちは千羽鶴を折ることになります。ただ言われたから折るのではありません。この本を読んだことで、鶴を

折る意味、その行為に込められた願いを私は知ることができました。千羽鶴。それは禎子が残してくれた人から人につなぐ思いやりの心。当たり前のように当たり前ではない日々感謝しながら、やさしい心を育て、生きていきたいです。